

二人の釣師

学校教育学部 岩崎文人

昨年の暮れ、12月9日、釣りを愛し、食を愛した作家開高健氏が逝った。あまりにも早い58歳の死であった。行動する作家という名にふさわしく、その世界は、純文学の領域にとどまらず、ベトナム戦争のルポルタージュから、アマゾン、アラスカの釣り紀行と多彩な作品群にわたる。小説の背景といった点で考えても、「流亡記」(昭34)は万里の長城建設を描いたものであるし、「輝ける闇」(昭43)は言うまでもなくヴェトナムが舞台であるし、「夏の闇」(昭46)はヨーロッパが舞台であり、「日本三文オペラ」(昭34)は大阪、「ロビンソンの末裔」(昭35)は北海道が舞台である。

開高氏は、日本の作家にはめずらしく軽妙な警句しん言の類を作品中に象眼することのきわめて鮮やかな作家であったが、その下地は、寿屋(現・サントリー)宣伝部時代の名コピーにある。ちなみに、広告史上の名作としていまだ語りつがれている「『人間』らしく／やりたいナ／トリスを飲んで／『人間』らしく／やりたいナ／『人間』なんだからナ」は開高氏の手になるコピーである。今この寿屋時代を別格として、氏のさして長くない生涯をふかんすれば、いささか陳腐な物言いになるが、文学的出発となった「パニック」(昭32)「裸の王様」(同)二作は、奇しくも氏のたどるべき道程を予兆していた作品といつてよい。

「地下水がわくように」「無数のネズミが先を争って」薄明の湖岸に飛び込むという「パニック」に描出された異様なエネルギーは、あるいは、58歳という早い終末に向かって世界を疾走した開高氏の貪婪なまでの好奇心と強じんな行動力そのものであったかもしれな

い。「裸の王様」の太郎と画塾教師「僕」とがのぞき見た「牧場や猟林」がある「水底の世界」は、氏が追い求めていくことになる裸形の自然を象徴していたのかもしれない。

すさまじいばかりの氏の行動力と野性への憧れをもっとも端的に示すのは、氏の釣り紀行である。

「週刊朝日」に連載されたルポは、アラスカに始まり南極洋までの9か月におよび、自動車走行距離は52,340キロであった。この移動がいかにか途方もないものであるかは、たとえば赤道一周距離約4万キロと比較してみればよい。釣った魚は23種以上だったという。

ところで、釣師開高氏の出発は、多くの釣好きがそうであるように、少年時代に始まる。「開口一番」(昭49)収録のエッセー「まずミミズを釣ること」には次のようにある。私の少年時代は大阪の南の郊外だった。その頃はちょっと歩けば川があり、池があり、野があった。毎日毎日私は魚とりに夢中で、学校の教室で教科書を読んでいると目と紙の間にキラキラ射す川が流れ、巨大なコイやナマズがゆうゆうと泳いでいくのが見えたのである。

ここには、おそらく、開高氏の釣りの原点があるといつてさしつかえないであろう。思えば、氏の釣りは、「巨大な」幻の魚を求めてのそれであった。言葉を換えれば、闘いの釣りであった。大物釣りといえれば当然海釣りであるが、氏のターゲットは淡水魚であった。ここにも、川、池、野を愛し、鳥獣虫魚を愛した氏の禁欲的な釣りの特質がある。

こうした氏の釣りの特色がもっともよく表れているのは、「オーパ！」(昭53)の世界で

ある。

この釣り紀行は「いまだに土堤も、橋も、ダムもない、地上唯一の、そして最後の大河」アマゾンを中心にしたものである。そこでのドラド（「全長が1メートル前後。体重は7キロぐらいから稀に20キロ余。背が緑、体側がイエロー・オレンジ、鱗が暗赤色。体側には首から尾にかけて切取線のような黒い線が何本となく平行して走っている。」）釣りの一節を次に引く。

すると突然……というやつ。ふいに強い手でグイと竿さきがひきこまれたかと思うと、つぎの瞬間、水が炸裂した。一匹の果敢な魚が跳ねた。右に左に跳んでは潜り、消えては走り、落下しては跳躍した。一瞬で疲労が消え、手がスター・ドラッグに走り、ハンドルに走って、糸を張りつめた。ここでゆるめるとルアーを吹きとばされてしまう。ブレーキをしめる。竿をしゃくる。二度、三度、しゃくる。ブラウン・トラウトをやったときの、あのコツだ。英雄を手にとって見たければ、疲れさせることだ。牧場の草むらによこたえて、汗まみれの目で眺めると、これはまさに黄金だった。ドラドだった。夕陽が燦爛、その腹の金と、鱗の白に輝いた。開高氏がルアー、まりール竿の似合う動的な釣師とすれば、氏の敬愛した作家井伏鱒二氏は溪流釣りのぴったりした静的な釣師である。井伏氏の「川釣り」(昭22)は、釣り随想の名著として知られるが、含しゅうの入井伏氏にふさわしく、この書は、おおよそ釣れなかった話に終始している。「川釣り」冒頭の

エッセー「釣魚記」に「釣りの好きな人は案外せつかちで好色だということである。」という一文がある。この真偽は別として、もうひとつ付け加えるとすれば、間違いなく自己顕示欲が強いという項であろう。そもそも魚拓なるものの存在自体がそのことをよく物語っている。

ところが、氏の釣り随想は、「まえがき」へき頭の一文からして「私は釣りが好きだが釣りの技術に拙劣である。」である。巻頭の詩「溪流」は、「今日はさつぱりつれない。」から書きはじめられる。ここで詳述する余裕はないが、こうした釣り随想の世界は氏の文学の特質——決して声高な主張をしない、自己を生な形では語らない——と密接なつながりがあるように思える。井伏氏が唯一我々と同じ凡俗の釣り好きの位置におりたつのは、空想の釣りにふけり、その釣果を誇るときである。「雨河内川」には、「空想の真青な淵で、五尾も六尾も空想の山女魚を釣りあげた。」とある。最後に、開高健、井伏鱒二両氏の書に記された名言を次に記しておこう。一時間、幸せになりたかったら、酒を飲みなさい。三日間、幸せになりたかったら、結婚しなさい。八日間、幸せになりたかったら、豚を殺して食べなさい。永遠に、幸せになりたかったら、釣りを覚えなさい。「オーパ！」

釣竿を持つには、先づ邪念があつてはいけない。自分は山川草木の一部分であれど、念じなくてははいけない。「川釣り」

